

今回は天文部 3A 小林優太君が寄稿してくれました。

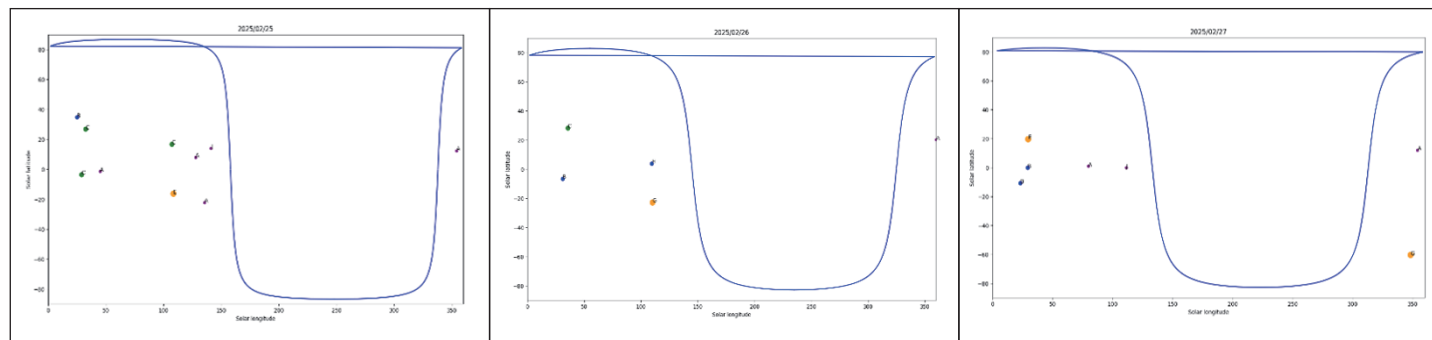
太陽を見よう！

夏、我々の肌を焦がす太陽。望遠鏡で見えてはいけない絶対的禁じ手であるそれは、時々刻々と変化している。日が出でて落ちるのは地球が自転しているからであるが、その変化は太陽そのものにもある。天文部では晴れの日には太陽観測を行っている。望遠鏡を用いて板に像を結び、太陽黒点の記録を行っている。黒点とは、太陽表面上に存在する黒い点のことで、温度が他の部分より低いため黒く見えている。黒点の様子は毎日変わるし、黒点を観測することで太陽が今どのような状況にあるのか推測したり、太陽に関する様々な事実を導き出したりすることができる。

例えば、中心にある黒点は丸く映るのに対し、端にあるのは楕円形に押しつぶされているように見える。このことから、太陽が球形であることがわかる。また、日を跨いで観測すれば、同じような黒点の集まりが移動しているように見える。このことから太陽が自転しているということと、その向きと速さを割り出すことができる。10年目になると黒点が11年周期でその数と分布が変化していることに気づき、またその集中する部分は赤道からやや傾いた平面にあるということも推測可能だ。このように、様々な観測スパンで知ることが変わっていくことが、太陽観測の醍醐味なのである。

とはいえ志木高天文部で充実した太陽観測ができているかと聞かれれば否と答えざるを得ない。データの質と量が大いに不足している。ぜひ、いつも照らされている太陽、たまには今どのような調子なのか想像を巡らせてみてはいかがだろうか。

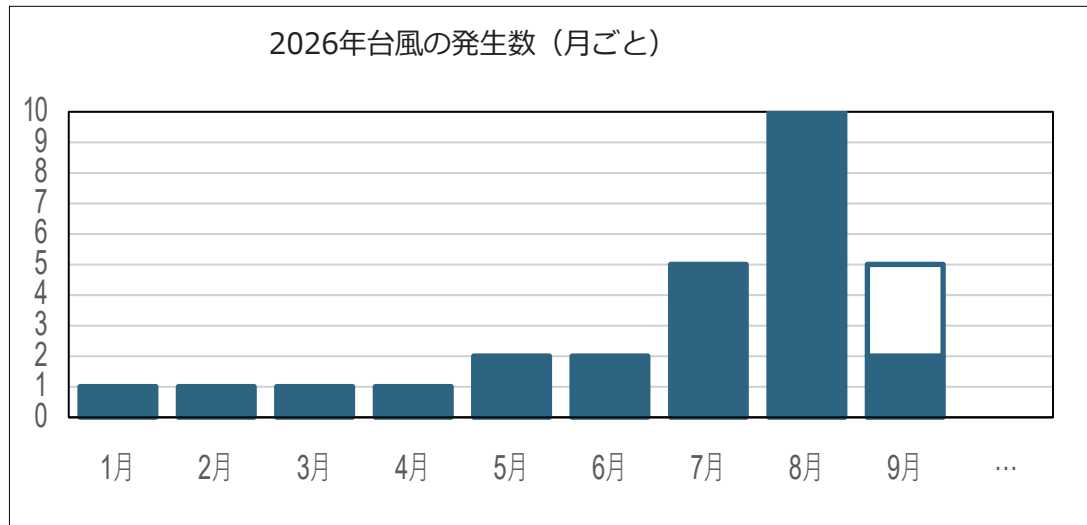
下の図は、2025年2月に取った三日連続の黒点データである。黒点は球面上に存在するため、太陽の経緯度に直した。青線で囲まれている部分は観測当時見えていなかった太陽の部分（つまり地球の反対側）である。目線を右にずらしていくと、黒点が消失したり生じたりしていることがわかる。



3A41小林優太

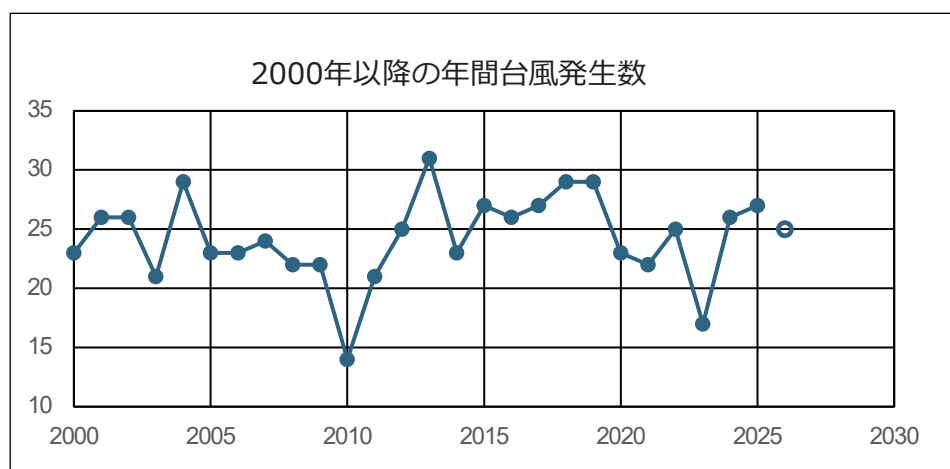


前号で「今年は毎月台風が発生しています。果たして何個の台風がつくられるのでしょうか。」と書きました。今年は本当に台風がたくさんできています。これが配布される頃には、日本の南にある熱帯低気圧が台風25号になっていることでしょう。



前号が発行されたとき、7月2個目の台風ができかけていました。その後、7月は5個、8月には10個の台風が量産され、9月も2個目ができました。ここ10年間の9月の台風発生数は平均で5個です。すでに9月後半に入りましたが、あといくつできるのでしょうか。

さて、2000年以降に一年間に発生した台風の個数の年変化を追ってみました。この25年間に平均で年間24個の台風ができています。今年はすでに25個ができ平均を超えました。2013年には31個の台風ができましたが、今年は果たして何個の台風がつくられるのでしょうか。



(Higuchi)

秋の句

Haiku

草刈りしところにきらり螢草
玄関を塞げる櫓法師蟬
虫の朝臨時休校解けにけり

学校説明会に参加した皆さんへ

爽やかな高校生となりぬべし

悼 佐野先生

秋蟬にうちひしがれてゐたりけり

前北かおる

志木高の正門に入ってすぐ左にある胸像が誰をあらわしたもののか、もし知らない志木高生がいたらぜひ憶えておいてほしい。電力業界で活躍し、「電力の鬼」と呼ばれた実業家・松永安左エ門(1875-1971)である。60歳を過ぎてから茶の湯に傾倒して「耳庵」と号し、集めた茶道具や美術品は、いま東京国立博物館と福岡市美術館に所蔵される。慶應に学んで福澤を尊敬し、自身が1937年に設立した東邦産業研究所の土地と建物を戦後、慶應に寄贈。いま志木高が建つのがこの土地で、松永がいなかったら志木高は存在しなかったと言って良い。

その松永の友人に、同じく慶應に学んだ実業家・小林一三^{こばやしいちぞう}（1873-1957）がいる。阪急電鉄、阪急百貨店、宝塚歌劇団をつくった人物である。2人の在学期間は重なっているものの、親しくなったのは卒業後、友情が特に深まったきっかけは、1910年、鉄道敷設の認可に絡み、ともに贈賄の容疑で大阪の堀川監獄に入れられ、中之島の裁判所で取り調べを受けたこと。大らかな松永と几帳面な小林、性格が正反対だったのも長い友情の支えになったらしく、「その相反したところに、二人に切っても切れない友情の繋がりが生まれた」と松永は語っている。小林は40代で茶の湯を始め、2人は1936年頃から茶会でも交友するようになる。小林は茶人としては「逸翁^{いつおう}」と号し、独自の美意識で美術品や茶道具を集めた。そのコレクションは没後に開館した大阪の逸翁美術館に所蔵されている。

この逸翁美術館のコレクションを紹介する展覧会が、いま六本木のサントリー美術館で開催されている（11月8日まで）。始まったばかりでまだ行けていないが、リストを見ると茶碗や茶入といった茶道具のほか、古筆や古写経、中近世の絵画を数多く展示している。展覧会のタイトルになっている与謝蕪村（1716-1784）は俳人としても知られる江戸時代の絵師で、呉春（1752-1811）はその弟子。それぞれの代表作である《奥の細道画卷》（重要文化財）、《白梅図屏風》（重要文化財）が展示中。また、《佐竹本三十六歌仙切 藤原高光》（鎌倉時代、重要文化財）が会期後半（10月14日以降）に展示される。これはもともと優れた歌人36人を描いた絵巻で、1919年に1人ずつバラバラに切断されて名だたる蒐集家に分蔵された。松永もその1つ《住吉大明神》を所蔵（現在は東京国立博物館蔵）。「佐竹本」の名は、秋田藩主・佐竹家に伝わったことに由来する。

小林が亡くなった2ヶ月後、生前特に親しかった松永、
はたけやまいっせい 畠山一清 (1881-1971) 、ごとう けいた 五島慶太 (1882-1959) の3人によつて追悼の茶会が開かれている。畠山は荏原製作所の創立者、五島は東急グループの創始者で、いずれも近代を代表する実業家で茶人、茶道具や美術品の蒐集家である。畠山のコレクションは荏原畠山記念館(高輪台)で、五島のコレクションは五島美術館(上野毛)で見られる。どちらもオススメの美術館である。

他方、この展覧会の会場であるサントリー美術館も、小林と深いゆかりがある。小林一三の娘・春子はサントリーの創業者・鳥井信治郎（1879-1962）の息子・吉太郎と結婚。2人の子・鳥井信一郎はサントリー3代目社長になっている。サントリーホールディングスの現社長・鳥井信宏はその息子である。企業の歴史は人の歴史、美術の歴史もまた然り。



秋の七草で知られるヤマハギは、本校に1本（個体？）しかない．ちょうど今頃，体育館－斜路の間の芝生で赤紫色の花を咲かせている．漢字としては「ハギ」には「萩」の字があてられるが，これは「秋を象徴する草」として独自に創作された字であるとのこと．中国でも同じ漢字は存在するが（両者に関連性はない），ヨモギ（キク科）の仲間を指すらしい．

その利用法は，主に観賞用としての庭木や公園樹だが，茶花としても使われる．植物体全体として栄養価が高いので，放牧などで家畜の飼料としても利用される．『万葉集』で詠まれている植物の中で最も多く詠み込まれる植物としても知られる．秋の到来を告げる植物である．

Grass

16.Jul

ハエドクソウ，ヘクソカズラ，ヤブラン，オモダカ，カラスウリ，キツネノマゴ

11.Aug

コニシキソウ，ヤマノイモ，ヒメムカシヨモギ，ノブドウ

22.Aug

カンガレイ

10.Sep

ヒナタイノコヅチ，ヒョドリジョウゴ，ダンドロボロギク，カナムグラ

Wood

【8/11】クロマツ

【9/10】ヤマハギ

【7/16】アオギリ

【7/16】ムクゲ

【8/22】ヌルデ

【8/22】ウド

【ヤマハギ】マメ科ハギ属



(Aramaki)

(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術（博物館）	原 浩史 (Hara)
	俳句	前北 馨 (Maekita)
	日本文化（香道）	井之浦 茉里 (Inoura)
	日本文化（茶道）	池田 卓也 (Ikeda)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	植物画・編集	荒巻 知子 (Aramaki)